

第2部トークショー

「未来につながる伝統芸能の魅力」

司 会：大野城まどかぴあ館長
ゲスト：日本舞踊家
文化庁文化審議会委員、北九州市顧問

林 田 ス マ 氏
藤 間 蘭 黄 氏
柴 田 英 杞 氏

(林田氏)

素晴らしいお二人に、これからお話を伺ってまいりたいと思います。

まず最初に、蘭黄先生と呼ばせていただきますが、このお姿、このベストは何だと思いに
なりますか。皆様、おわかりですか。先生、ちょっともう一度お立ちいただいて、もう立っ
ていらっしゃる姿もすてきなのですが、これ、実は小倉織なんですって。小倉織のベストを
お召しになっていらっしゃいます。いかがでしょうか。どうぞ、大きな拍手をお願い致しま
す。

(会場「拍手」)

お気持ちいっぱいにお越しいただいて、本当にありがとうございます。

(藤間氏)

すみません。ちょうど、こちらでお話をさせていただくという機会を頂きました折りに、
こちらは小倉織が有名と伺いまして、早速、ちょっとホームページで調べまして、これで何
かできるかしらと、ちょうど一月前に注文しまして、この30日に出来上がってまいりまし
て、ちょうど間に合いました。

(林田氏)

良かったです。本当にありがとうございます。本当によくお似合いでいらっしゃいます。

(藤間氏)

すみません、腰を折りまして。

(林田氏)

とんでもない。よろしくお願ひ致します。

今、市長が、一所懸命お話をしてくださった「東アジア文化都市 2020 北九州」素晴らしいプレゼンで、そして 2020 年に向けて、この文化都市としてこれから動いていかなければいけない、そのことについて、お二方からたくさんのお言葉を頂きたいと思うのですが、まず最初に、市長は、この 2020 年の文化都市を受けて「やった！」とお思いなのかもしれませんが、とても淡々とやわらかに、その思いを 30 分間語ってくださいましたが、お二方は、それをお聞きになって、どんなふうにお感じになったのか、一言ずつ、蘭黄先生からよろしいですか。

(藤間氏)

やはり、今、淡々とおっしゃったのですけれども、非常にやはり、2020 年に向けての静かな熱意というのが、すごくこう伝わってくる気が致しまして、私もこの場で、図らずもご縁を頂いて、このお話を伺わせていただいて、「ああ、いい時間を頂いたな」と思って拝聴しておりました。

(林田氏)

はい。今日は、たくさんアドバイスを頂きたいと思います。

(藤間氏)

恐れ入ります。

(林田氏)

では、柴田先生は、今、お聞きになっていていかがでしたか。

(柴田氏)

改めてなのですけれども、北九州市のまちというのは、多様性と、それからポテンシャルのものすごく強いまちだなと。前々からそう思っていたのですが、今日、市長のプレゼンを伺って、ますますその強さを感じました。ですから、贅沢なまちだなと思います。それを 2020 のこの「東アジア文化都市」で、国内外にどう発信していくのかということがすごく重要だと感じましたし、いっぱいある文化資源、地域資源を、どう料理していくのか。それをどう世界に発信していくのかということが、非常に重要なんだなと感じました。

(林田氏)

そうですね。多様な財産があって、それをどのようにして発信していくかというのが、こ

れから大きな課題だと思うのですが、これからお話をさせていただくテーマは、「未来につながる伝統芸能の魅力」ということで、どのようにしてこの伝統芸能を未来にもつなげていくかということもお話に加えていただきたいと思いますと考えております。

まず最初に、この日本文化の魅力をお話させていただくのですが、蘭黄先生ご自身が、何かもう本当に世界中を回っていらして、一番近い所ではどこにいらっしゃいましたか。

(藤間氏)

先日までインドネシアに行っておりまして、これはASEANなのですね。ASEANの本部がインドネシアにございまして、そこで、年に1度、ASEAN諸国が回り持ちで文化大臣の方が集まって会議をする。その席上、「ASEAN+3」です、3というのは何かというと、ちょうどこの「東アジア文化都市」の3か国、日本と中国と韓国。この3か国。「ASEAN+3」という催しでございまして、そこで大臣の会議の後に、各国からいろいろな伝統芸能に携わる者が出てきて、ほんの10分足らずなのですが、文化を紹介するということで、文化庁のほうからお話を頂きまして、日本のものとして踊ってまいりました。

(林田氏)

文化庁の文化交流使として、本当に世界中、アメリカ、フランス、とにかくあちこちで活動して来られましたので、まず、蘭黄先生のご活躍がどのようなご活躍なのか、少し映像を交えながら、蘭黄先生を感じていただきたいと思いますと思いますが、映像をよろしいでしょうか。お願い致します。

間もなく出てまいります、蘭黄先生、どの部分を気にしながら、注意しながら拝見したらよろしいですか。

(藤間氏)

もう、どの部分と言う間でもなく、4分ほどで終わりますので、とりあえずご覧いただきまして。

(林田氏)

そうですか。

映像

(会場「拍手」)

(林田氏)

素晴らしいですね。もっともっと拝見したいと思います。

(藤間氏)

恐れ入ります。

(林田氏)

日本舞踊家・藤間蘭黄先生とご紹介したのですが、本当にコラボレーションを含めて、すごい幅広さですよ。

(藤間氏)

何かこう、自分で面白がって、面白いと思うことをやっているうちに、こんなになってしまいましたという感じなのですけども。

(林田氏)

そうですね。面白いと思うことを、面白いと思いながら、どんどんやっていかれる。そして、いろいろなこととつながっていかれるということなのですね。

(藤間氏)

本当にそれは、ありがたいことです。当人はもう至って面白がっているだけなのですけども、何かいろいろなことにつながってきまして。

(林田氏)

世界でこうしていろいろな活動をなさっていて、例えば、海外でいろいろなことを表現なさって、世界に出て行って海外から見ると、この日本の文化というのは、どんなふうに映るんだろう。どんなふうにお感じになるのでしょうか。

(藤間氏)

そうですね。私も、海外へ出させていただくようになるまでは、それほど気にもしていなかったのですが、海外に行ってみますと、やはりこの日本の独自性。日本文化の特殊性というのでしょうか、そういうものをすごく感じますね。1つには、やはり、日本には春夏秋冬の四季がある。これがはっきりしている。そしてまた、日本独特の精神性というのでしょうか、そういうものがある。そういう中で培われた伝統文化。日本舞踊もその1つだと思うのです。そういうものというのは、まず第一に、海外においては非常に珍しいですね。

(林田氏)

珍しい。

(藤間氏)

つまり、やはりおおむね、もちろんヨーロッパなんかは四季もごございます。けれども、日本のように、はっきりとはしていないというのと、もう1つは、四季それぞれの風物という、その象徴するものというのが、あるようではなかったりするのですね。日本ですと、割とそういうものというのがございますね。そういうものが、私たちがやっている、いわゆる舞踊だけではなく、音楽でも、それから文学でも、古典のものには全部取り入れられている。

(林田氏)

確かに。

(藤間氏)

これが、やはりすごいなということが1つ。

それと、もう1つは、その取り入れ方なのですね。皆さんも、どこかでお耳にしたことがおありだと思うのですが、あるものを持ってきて別なものを表すという「見立て」という文化。これが、海外に行って「見立て」というお話をすると、ほぼ訳語がないのです。その現地の言葉で訳する言葉がない。

(林田氏)

ああ、そうですね。

(藤間氏)

なので、「Aというものを持ってきてBを表す」みたいな解説を全部付けながら言わないといけないのですが、日本においては、「見立て」というのは、本当に、踊り、それからお芝居の世界だけではなく、お茶、お花、あるいは食文化。今、和食ブームですね。それに至るまで、「見立て」というのは、全部に共通する言語。「見立て」が完成するポイントというのは、これは、私がいつも海外でご説明申し上げる時にお話するのですが、「見立て」というのは、作り手側だけでは完成できないのですよ。受け取り手側がそれをそう見るから、初めてそれが生まれる。

(林田氏)

なるほど。

(藤間氏)

この、作り手と受け取り手のコミュニケーションをやっている。こうやって面と向かわなくてもそれができるとというのが、これが日本文化の非常に特殊なことではないかな。素晴らしいところではないかなというのを、とても今感じておりますね。

(林田氏)

なるほど。そういう中で、日本文化、日本の伝統芸能みたいなものが、ずっと育まれてきた、そして育ってきたということなのではないでしょうか。

(藤間氏)

そうですね。やはり、日本の伝統芸能って、もう1つ面白いなと。これを言ったら、もう元も子もないかもしれないのですが、日本の伝統芸能の多くのものって、実は、徳川時代につくられたものというのが、今、かなり残っている。もちろん、平安時代から綿々と続いている、室町から発祥の能楽とかございますけれども、結局、それが、今、我々が見ることができるのが主なものは、もうすべて、江戸という時代を通り抜けて残ってきたもの。江戸で通り抜けたということは、一言にいうと簡単に思うのですが、実は、江戸時代って、保護されてきたのは武家の文化だけであって、つまり歌舞伎であるとか、踊りであるみたいな、こういうものは、もう弾圧されこすられ、受け入れられて守られたなんていう記憶がない芸能なのです。なので、今こうやって国がかりで「伝統芸能行け」と言われても、「いやいや、私たち、今まで伝統的に虐げられてきたのですけど、どうしたらいいのでしょうか」という状態ではあります。

ただ、これからの時代は、やはり、民衆の力。もちろんそれが大事なのですが、それが政府とともに、やはりこう官民一体となって伝統というものを大事にしていく機運というのは、これは非常に、我々にとってもありがたいですし、これから、じゃあその中で、伝統芸能、伝統文化に携わる者として、どういう道を行ったらいいのかというのは、これも日々課題として、どこかで考えるというか、思っております。

(林田氏)

そうですね。

そして、これを、私たちは今度、次の世代に伝えていかなきゃいけない。継承していかねばいけない。この辺は、どんなふうにお感じになっていますか。

(藤間氏)

そうですね。継承というと、簡単に申しますと、例えば、私がさせていただいている日本舞踊ですと、いわゆるお稽古事ですね。かつては、私が子どもころというのは、5本の指を出したら、子どものお稽古事の、何か、何か、何かの中の1つに、日本舞踊はもしかしたら入っていたかもしれない。ところが、今は指を10本に増やしても、そこに入らない状態になっている。実は、これが現状なのです。ですから、お稽古事として盛んにするというのは、これは簡単なことかもしれないですし、次の世代ということを見たときには、直接教えるというのは、一番早道なのかもしれない。ところが、そうやって10本に入らなく

なってしまった現状となってみると、もしかすると、もうこれから御弟子さん募集、子どもさんやってとって、「伝統芸能子ども教室」みたいな形で国もやっています。でも、なかなかそれが根付くようで根付かない。

なぜかという、やはりある程度、きちんとしたもの、ちゃんとしたものをお見せする機会がない。ただ、自分たちがやるというだけでは、やはりいけない。やはり、舞台をご覧になっていただいて、「ああ、あれは夢があって楽しい」「すごくいいな」ということ、そういう方を増やしていかないと、なかなかこれから次へつなげることはできない。

逆にいうと、次へつなげるためには、やはり、舞台の上で、見ていただく方に「ああ、日本舞踊っていいな」「踊りって素晴らしいな」「日本の文化ってやっぱりいいよね」とっていただけるものを提示していく、この大きな責任があるのではないかなと、今、思っております。

(林田氏)

なるほどですね。「いいな」をどんどん、どんどん増やしていかなければいけないということですね。

柴田先生、今、蘭黄先生のお話をお聞きになられながら、どんなふうにお感じになりましたか。

(柴田氏)

私は、伝統芸能に対する思いというのは、一番には温故知新というのがあって、やはり古き良きものから次の時代への新しい価値を創出するということは、すごく重要だと思います。

やはり、伝統というのは、守り育てていくということも重要だけれども、やはり、私は、革新の連鎖だと思っているのです。その時代、時代に、やはり皆さんから評価されたものが次の時代に残っていくわけで、何かもうひたすらに伝承だけをやっていればいいということだけではない。だから、私は、「伝承」と「伝統」というのは使い分けています。ですから、伝統というのは、やはり革新の文化なので、革新の連鎖だと思っていますので、やはり、未来につなげていきたいなということを思いますね。

(林田氏)

そうですね。蘭黄先生が、今、やっていらっしゃる活動が、まさにそれですね。

(柴田氏)

その通りなんです。

(林田氏)

そうですね、そういうことですね。

さて、2020年が近付いてきて、東京オリンピック・パラリンピック。これは、もちろんスポーツのイベントなのですが、それだけではなくて、文化に対して、どれだけ日本がこれから頑張っていかなければいけないかということは、すごく大きな課題だと思うのですが、文化のオリンピックアードについては、柴田先生、これは、どんな感じでとらえられているのでしょうか。

(柴田氏)

オリンピック憲章の中に、「オリンピックというのは、スポーツの祭典であると同時に文化の祭典である」という、そういう条文がございます。

(林田氏)

あるんですね。

(柴田氏)

はい、ございます。それで、その文化の祭典であるということが花開いた、皆さんから注目されたのが、恐らく皆さんもご記憶に新しいと思うのですが、2012年のロンドンオリンピックです。BSでも開閉会式を盛大に繰り広げられた映像が、私たちもダイレクトに拝見することができました。それから、文化の祭典でもあるということを目指し、ロンドンオリンピックをひとつモデルにして、日本も頑張る文化の祭典を繰り広げようじゃないかという機運が盛り上がったわけです。

それで、文化庁としては、全国津々浦々で、いろいろな文化の花を開花させるというか、開かせるという動きをしようじゃないかという、そういう考えでありまして、オリンピックは東京都が招致したものですから、東京で開催するものについては東京都が全部マネジメントするわけなのですが、文化庁としては、東京都だけでなく、やはり文化を国民の皆様が親しんでいただくという機会を設けて、次につなげていきたいという強い思いがありますので、やはり、全国で文化の祭典を開催するという方向で行っております。

(林田氏)

なるほど。つまり、東京のオリンピックではなくて、全国あちこちで、文化の花も開かせていかなければいけない。まさに、北九州は、特にその年に合致しているわけですから、そういう意味では本当に責任重大でもありますね。

(柴田氏)

そうですね。ですから、「東アジア文化都市」というのは、コアプログラムの1つに挙

がっています。そのほかに、2020年では、「日本博2020」というのも開催することが決定しました。

(林田氏)

「日本博」？

(柴田氏)

「日本博」。今、現在では、パリで「ジャポニズム」という祭典が繰り広げられています。

(林田氏)

そうでしたね。

(柴田氏)

はい。来年は、アメリカで開催ということが決定しているということで、2020年は政府として「日本博」を掲げて、日本の伝統文化から現代アートまで、全世界に発信をして、オリンピック・パラリンピックで、たくさんのお客様がいらっしゃいますので、その方々に日本の文化でおもてなしをするというか、そういう企画であります。そういう、いろいろなプログラムがある中で、「東アジア文化都市」。それも、地方開催で北九州ということで、西のほうでは初めての開催ということになりますので、もうかなり、文化庁はこの「東アジア文化都市」に力を入れております。

(林田氏)

そういう意味では、北九州はアジアに近いですし、さまざまな財産があって、それを前に出しながら。確か、今、金沢市、そして次の年が、豊島区、そして北九州市と、こういうふうに、だんだん進んできたのですが、さっき、市長も「早くしっかりと準備をしなければ、すぐにやってきますよ」とおっしゃっていましたが、具体的に、どんなふうに進めていったらよいのかというのがあって、過去の取り組みを含めて、どんなふうな取り組みがおこなわれたとか、具体的に少し柴田先生のほうには映像を交えながらお話しただけならうれしいなと思います。

(柴田氏)

はい。じゃあ、映像を。

(林田氏)

はい、お願い致します。

映像

(柴田氏：映像説明)

こちらは、京都で開催した時の映像を使っております。

市長のプレゼンの中にもありましたけれども、開会式・閉会式の式典がございます。これは、開会式。日中韓のショーケースということで、文化の交流になります。

北九州で開催される時の中国と韓国の都市がまだ決まっていませんので、どのような団体が招聘されてくるのかわかりませんが、開閉会式の真ん中が、そのコア期間ということになりまして、さまざまな事業が繰り広げられます。

世界のトップクラスのアーティストから、市民の草の根の文化交流まで幅広い活動がおこなわれます。日中韓の文化交流というのも、非常に重要な柱になっております。これは、閉会式（クロージング）の事業になります。

(林田氏)

ご覧いただきましたように、これは2017年の京都の分を、今、見ていただいたのですが、これが北九州で、北九州らしい何か取り組みへとつながっていくわけですね。

(柴田氏)

そうですね、はい。これからですね。

(林田氏)

わくわくですよ。

(柴田氏)

わくわくですね。

(林田氏)

そうですね。そして、多分、今日、会場にいらっしゃっている方々は、それぞれのご専門の方々がいらっしゃると思うのですが、市民の方々をも、どんどん入っていただいてということですから、皆様方の心の中に、「私ならこんなことができる」「私たちはこんなことが」その中から、夢の種みたいなものが、だんだんこう、これからふくらんでいくのではないかと思います。

(柴田氏)

そうですね。非常に重要なのは、世界のトップクラスのアーティストから市民の文化交流までと申し上げたのですけれども、やはり、3つくらい大きなコンセプトがあると思うのですね。

(林田氏)

コンセプト？

(柴田氏)

コンセプト。はい。基本的な事業の考え方です。1つは、世界標準ということになります。開会式は、ショーケース、日中韓のいろいろな文化公演を20分くらいに縮めて、その国々の文化のアピールをするのですけれども、共に演じるという「共演」もあると思うのですけれども、もう1つは、競い合う「競演」というのがありますし、それから、お互いに響き合うという「響演」もありますので、やはり、文化というのは相互理解だと思うのです。ただ、それだと、やはり、何というのでしょうか、物足りないといえますか。やはり、三国が競争し合って、未来をみつめて、文化で対話をしていくというか、そういう考えもないといけないと思うので、世界標準の舞台をやはりご披露しないとイケないということが1つですね。

(林田氏)

「競い合う」と、「響き合う」という部分が、今、私は心に残ったのですが、本当に世界標準。そして、「競い合う」「響き合う」ということ。これはすごく大事なことです。

(柴田氏)

そうですね。文化にとっては、すごくそれが重要で、私は「文化の触発性」と考えているのです。

(林田氏)

「触発性」？

(柴田氏)

はい。やはり、響き合って触発しないと、いい文化は紡ぎ出せないと思っています。

(林田氏)

なるほど。

(柴田氏)

それをやはり、北九州市で実現すべきだと思っています。

それから、その頂点を極めると同時に、市民の皆さんの文化に対する意欲とかモチベーションとか、そういうものを、やはり未来につなげていかななくてはいけないと思いますので、市民参加というものを非常に重要なキーコンセプトにする必要があると思っています。

3つめは、共生社会です。あらゆる人々が、障害者の方々の文化芸術活動も含めて、さまざまな人々が文化芸術活動に参加する。いいものを見て、それを享受していく。それで、次につなげていくという、この3本柱が非常に重要なコンセプトなのではないかなと思っています。

(林田氏)

なるほど。本当に市民の方々が、「何かありよるけ」みたいな、「何かしよるけ」みたいな感じでなくて、本当にご自分たちがどんなふうに関わっていかれるか、共に動いていかれるかということを考えていかないといけないということですよ。とても楽しみですけど、とても難しいことだと思いますね。

(柴田氏)

はい。

(林田氏)

ですよ。

(柴田氏)

難しいけど、日本のためにも、北九州のためにも、やはり推進していかなければいけない。この「東アジア文化都市」というのは、北九州市で開催はされますけれども、やはり、国の重要な文化事業の1つでありますので、国の文化政策を推進する、それから北九州市の文化政策を推進するという両立をさせないといけませんので、非常にチャレンジングな事業だと思いますけれども、やりがいもその分あるということで。

(林田氏)

そうですね。ものすごく、やりがいがあるなと思いますよね。今、京都の映像をご覧になっていて、蘭黄先生は、どんなふうにご覧になりましたか？

(藤間氏)

そうですね、いやもう本当に、今、柴田先生がおっしゃったように、プロ中のプロのステージと、それから一般市民の方が参加する部分と、それから、もちろんパフォーミングアー

ツだけではなくて、いろいろな展示とか、あるいは体験事業とか、そういうものまで含めての、つまり、本当にすごい、もう一大プロジェクトであるなというのをすごく。

先ほど、市長のお話を伺って、「これはすごいぞ」と思ったのですが、今の京都の映像を見せていただいて、それは本当に、思っている以上に、これはもう大きな大きなことであるし、やはり、それができるだけの体力といったらあれなのですけれども、基礎体力みたいなもの、エネルギーですね。エネルギーというものが北九州市にはあるんだなということ、とても思っていて、わくわくしております。

(林田氏)

そうですね。北九州のエネルギーって、私たちが子どものころは、経済をぐんぐん支えていた、本当に七色の煙が八幡のまちを、どんどん煙が上っていた。でも、見事に、世界に冠たる環境都市として頑張ってきた。そして今、その文化という素地をもういっぺん見直して、そして、その大きな文化でもって、アジアの中の文化都市として動こうとしている。ものすごいと思います。その辺は、これから、柴田先生とか、蘭黄先生の力をどんどん加えていただいてと思うのですが。

蘭黄先生は、「国民文化祭・おおいた」のフィナーレのステージのすべてを取り仕切っていらっしゃると伺ったのですが。

(藤間氏)

すべてといいますか、フィナーレステージといいまして、国民文化祭の閉会式の直前で、その前の時間帯で、90分の舞踊劇というものをつくってくれというご依頼を頂きまして、ただし、そこには大分の芸術文化団体などに所属している方で、我も我もといって、お出になりたいと手を挙げた方たちは、なるべくたくさん参加していただきましょうということで、日本舞踊だけではなくて、民謡の方々、それからジャズダンスの方々、バレエの方々、モダンダンスの方々、それからヒップホップですとか、あるいは詩吟をなさっているの方々、邦楽で長唄の演奏をしてくださる方とか、能を楽しむの方々、それからコーラスの方々、そこに障害者の方たちも全部入れた90分のステージをつくってくれと。

(林田氏)

すごく大変じゃないですか？

(藤間氏)

てんこ盛りでございます。それを今、もう間もなくでございます。11月25日が本番なのですけれども、そんなことをさせていただいて。

(林田氏)

そうですか。皆様方をまとめて、素晴らしいフィナーレのステージするために、一番大事なことって何だろうとお感じになっていらっしゃいますか？

(藤間氏)

私は、常々、先ほど映像で見ていただいたコラボレーションなんかでもそうなのですが、いわゆる他流試合というか、異種で一緒にやるというときには、やはり、皆さんそれぞれ参加される方が一番の得意技を持ち寄ってくださいねと。別に、私は日本舞踊ですが、相手が例えばバレエダンサーと踊るときに、バレエだからといって、私がとんだりはねたりできるはずもないので、私はちゃんと日本舞踊を踊ります。バレエの方は、エセ日本舞踊は踊らなくていいです。ずっとバレエをなさっている方は、バレエをやってください。そういう感じで、参加する方が一番の得意技を持ち寄っていただく。これを私が交通整理というか、まとめさせていただくという、これですね。そうすると、得意技というのは、やはり皆さん、非常にもう、なさる方がキラキラするのですよね。

(林田氏)

キラキラですよ。

(藤間氏)

ええ。本当に。なので、そのキラキラを、私はただかき集めて、「はいどうぞ」とお見せするだけという感じになりますので。

(林田氏)

大分は近いですから、どんなふうに演出をなさるのか、皆さんにぜひ見ていただきたいと思いますが。

(藤間氏)

そうですね。見ていただきたいのは、やまやまなのですが、一般は公募でもって実は募集をもう締め切ってございまして。

(林田氏)

ああー、そうなんですか。

(藤間氏)

とても残念なことなのですが、何か、向こうのほうでも、グランシアターなのですから、もう席が満席状態で、出演者にも切符が回って来ないというお話を、ついこの間

伺ってきたところで、どうしようという感じなのです。

(林田氏)

そうですか。また、映像で何かご披露いただけたら。

(藤間氏)

機会がありましたら。

(林田氏)

北九州市の参考にもさせていただきそうですね。

(藤間氏)

ご参考になればいかがかなとは思いますが。

(林田氏)

それは、楽しいお仕事ですね。

(藤間氏)

本当に、それはおかげさまで、私も、こんなに楽しくて面白がってさせていただいていいのかなと思いつつも、いつも楽しくさせていただいております。

(林田氏)

今、いろいろな活動をなさっていて、さまざまな活動の中で、日本舞踊家として、これから次なる世代に向けて、この日本の伝統を継承していくこと。そのことについて、このタイトルが「未来につなぐ」というタイトルなのですが、未来につないでいくためには、どうしたらよいとお思いになりますか？

(藤間氏)

そうですね。先ほど、お話ししたように、まずはとにかく、こちら側の責任としては、こんなに素晴らしい伝統芸能、伝統的なもの、日本にはこんなにいい踊りがあるんですよというのをお見せするというのが、まず第一。でも、ただ、やっているだけでは無理です。そこにやはり、見ていただく機会というのをたくさんつくって、子どもさんたちに、なるべく見ていただく。

やはり、今はと申し上げると変なのですけれども、見るだけでは、なかなか皆さん納得できない。そこには、ちょっとした解説とか、お話を加えて。なるべく見ていただく環境づくりというのをつくって、それでやっていく。もちろん、学校公演とか、そういう出前のなこ

とも大事なことの1つだと思いますが、まずは、見ていただく。なんとか見ていただくというところから始めて、そしてやはり、未来につなげるには、この踊り手のほうが、今度はどんどん世代交代していかないといけない。その部分の若手というのを育成していかなくてはいけない。この2つですね。見ていただくということと、教えていくという、伝えていくということ。この2つが、やはり大切なことではないかと思っております。

(林田氏)

そうですね。はい。

お二人にいろいろなお話をちょうだいしておりますが、一番前で市長がじーっとこう聞いておられます。「さあ、いよいよ大変だぞ」とお思いになっていると思いますが、ステージ上に上がっていただいて、今度は3人のお話を伺いたいと思いますので、市長には、皆さんどうぞ、拍手でお迎えいただきたいと思います。

(会場「拍手」)

よろしくお願い致します。

市長、今、お話を伺っていますけど、やはり北九州市が2020年の文化都市として取れたんだという時は、心の中ではどんな思いでおられましたか？ 少しでも聞かせてください。

(北橋市長)

お二人のお話を聞いておまして、「えらいことになったな」という気持ちも生まれてきました。

(林田氏)

そうですね。でもやはり、その豊島区が前の都市、そして今度は北九州なんだと、やはり思いをずっとふくらませてこられて、市長のいろいろな思いの中で、この文化都市への思いというのずっとずっとふくらんできたのでしょうか？

(北橋市長)

はい。京都とか奈良とか、いろいろな所に私も出向いたし、スタッフの皆さんは、先生と一緒にロンドンの文化のオリンピックアードの状況も見たりして、一所懸命考えてきたのですが、道ノりが長かっただけに、喜びもあったのですが、今のお話を聞いて、これは、要するに市民の皆さんの参加盛り上がり、これがやはり大事なんだなということをしみじみ感じました。

(林田氏)

そうですね。柴田先生が、今、いろいろなお話をしながら、そしてアドバイスをいただいています。柴田先生は、これから北九州市が本当の文化都市に向けて、どんなふうにまちの文化創造をしていくか。何かその辺のところのアドバイスを少しいただけたらうれしいなと思います。

(柴田氏)

これから、日本が未来に向かって歩いていくときに、日本の持っている構造的な問題がありますよね。少子高齢化であるとか、それから財源が乏しくなっているとか、そういう緊急課題があって、2025年には団塊の世代が全員、後期高齢者になってしまう。社会保障費も激増するという、そういう中で、なぜ文化をあえてやるのかということころは、すごく重要なポイントだと思うのですね。

それを考えてみますと、やはり、最終的には人だと思ふのです。人。レガシーは人なのです。建物は、建ててしまえば、もうどんどん、どんどん、劣化していきますけど、人にいっぱい投資をするということは、素晴らしい価値をどんどん、どんどん生み続けていくことができるというわけで、やはり人だと思ふのですよ。基調講演の際に、市長も「文化芸術による都市再生、創造都市を目指す」とおっしゃいました。「一過性のイベントに終わらせてはいけない」ということもおっしゃいました。その通りなんです。それをやはり、どういうふうに、この「東アジア文化都市」を手段として使っていくのか。

私は、少子高齢化というのは、そんなに大きな問題だとはとらえていないのですけれども、やはり、あえていうのであれば、文化のつなぎ手です。それがいない地域というのは、やはり都市が衰退していくと思っています。ですから、お年を召した方も、ぜひ、この「東アジア文化都市」で人生100年時代と言われているから、もう生涯、文化芸術活動を通じて、いきいき元気で北九州市で暮らしていただきたいと思っていますし、ぜひ、それと同時に、今まで自分たちが経験してきたこと、専門的なノウハウ、人脈ネットワークそういうものを、やはり次世代の人たちに渡していく、つないでいく、その文化のバトンをどう継承していくのか、つながっていくのか、それがやはり、伝統という革新の連鎖につながっていくのかなと思うわけなのです。

最終的なミッションは、北九州市で暮らして本当によかったなと思えるようなまちをつくりたい。一番最後に市長が松本先生のイラストをご紹介いただきましたけれども、それがやはり理想ですよね。そのために、やはり文化芸術を活用して地域経済の活性化であるとか、社会的な価値を高めていくという、そういう動きをやはり、市民の中から沸き上がらせないといけないなと思っています。

最終的には、レガシーは北九州市民に宿るということを申し上げたいです。

(林田氏)

本当にそういうことですね。そして、その人々が、皆、このまちでよかったと。それは、本当は文化の風みみたいなものが、人の心の中に、本当にやはり最後は響いて行って、その心の豊かさがまちをつくっていく。そして、それが持続可能でなければならない。やはり、それがずっとつながっていかねばいけないということだと思っておりますが、先ほど、市長のご説明の中に、SDGs というご説明があったのですが、この辺を市長から少し詳しくご説明いただければと思いますが、国連でもって、きちっと、とても素晴らしい発表をなさったと私は伺っていますので、この部分が、さっきの4本の柱の中でも大事だとおっしゃっていましたが、市長から少し、その辺のところを目標として掲げていただくご説明をお願いしてよろしいですか？

(北橋市長)

17の持続可能な開発の目標。そこに、18個目にアートをぜひにとっている段階ではあるのですが、国連の舞台というのは、甲論乙駁というか、よくもめるところなのです。

(林田氏)

確かにね。はい。

(北橋市長)

ところが、全世界が一致して、地球がある限りこれからずっと同じ目標に向かって歩いて行こうと全会一致で決まったというのは、大変大きい意味があると思うのです。世界は共通の言葉を持ったと。そして、17の目標を見ていくと、北九州市民が、ずっと頑張ってきた目標でもあるのです。そのうち、環境であるとか、水とか、いろいろなことで高い評価も一部得ております。

つまり、私たちのまちを、もっと豊かで住みよいまちにしていこうと。その目標は、同時に日本全体を、世界を豊かにする道に通じているんだという、これまでの北九州市民の営み、努力というものが、改めて、私たちのシビックプライドになったと。世界が北九州に追い付いてきたんだと、ちょっとたいそうな言い方ではありますが、そういう意味合いを、今、感じております。

ですから、アートという面も、ぜひとも世界共通の目標にして、SDGsの中に盛り込まれて、それによって、国と国との間でいろいろありますよね。これからも、逆風が吹いたり、波が立ったりするかもしれませんが、だからこそ、アートの魅力、文化芸術のその豊かなこの人間の気持ちをさわやかにして感動させるという、この力を持ってある限り、世界は平和で繁栄していくと思うのです。そういった意味でSDGsが目指すものと、このアートが目指しているものというのは、共通のものを深く感じています。

(林田氏)

今、お聞きになっていて、その点は、柴田先生はいかがですか。

(柴田氏)

その通りだと思いますね。共感致します。それをやはり、「東アジア文化都市」で市民の方々と共に推進していきたいと思ひますし、市長のミッションでもありますので、尽力したいと思ひています。すごく共感致します。

(林田氏)

そうですね。これから、今日、おいでになっている方々は、この「東アジア文化都市 2020 北九州」。そうなんだ、これがもう本当に北九州中の人々に、この言葉が、ずっとこれから風のように深く深く浸透していくということが、すごく大事だと思うのですが、大変なことがいっぱいあると思うのですが、蘭黄先生、今、市長のお話をお聞きになりながら、今日いらっしゃっている方、そして、市民の皆様方に何かメッセージみたいなものを頂けたらうれしいなと思ひます。

(藤間氏)

いや、もうメッセージなんておこがましいのですが、やはり、今、市長がおっしゃったように、すべてをつなぐ共通のものって、なかなか見つけられないじゃないですか。その中で、アートという言い方も、私はあまり致しませんけれども、やはり、文化芸術というのは、国境もないですし、言葉の壁も容易に乗り越えてしまえる、非常に素晴らしいツールだと私は思ひますね。ですから、ぜひ、2020 の時にも、文化を中心とした都市づくりと申しますか、文化を中心としたその生活の場、生きている所をつくっていくということの大事さというのを、ぜひ、皆さん実感していただき、そして、国連がようやく追い付いてきたとおっしゃるくらいの、やはり素晴らしい北九州ですから、これはもう本当に全世界を牽引すべきアートのまちとして、私も微力ながら、何か参加させていただきたいなという思ひでいっぱいでございます。

(林田氏)

ぜひ、いろいろな部分でご参加をしていただいて、いろいろなお言葉をと思ひます。

人が大事なんだという話をずっと伺ったのですが、本当に、人に向けて発信することの楽しさと、苦しさと、難しさみたいなものがあると思うのですが、その辺は、柴田先生、どんなことが一番、人に対してメッセージするときの大切さだと思ひになりますか？

(柴田氏)

アートを推進するにあたって、マネジャーとなるような方の人材というのが、やはり全国

的に不足しているのですね。ですから、人に投資をするということは、支援人材を育てていく。生み出していかないと、その地域の文化が廃れていってしまうと思います。市民の方々にメッセージを送るとすれば、一緒に、共に、この「東アジア文化都市」を推進して行って、推進していく中で、いろいろな専門的なノウハウとか、「文化って本当に素晴らしいね」というような感覚を共有したい。共感のプロジェクトにしたい。それから、共に生きる社会をつくっていくための、やはり基盤づくりにしたいと思います。

(林田氏)

そうですね。本当にやはりそうになっていかなければと思いますね。

今、お二人のお話を市長がじっと聞いておられますが、「さあ、これから頑張っていくぞ」みたいな、決意みたいなものが。北橋市長は穏やかで、いつもお話を遠くで伺っていますけれども、本当に穏やかに優しくお話しして下さるのですが、今日は、少し強めに決意を皆さんたちに「こんなふうやっていくからね。皆さん、お願いね」と、核となる方々が、今日、多分おいでになっていると思いますので、市長の少し強めなメッセージを頂けたらうれしいなと思いますが、すみません、突然ですがお願いをしました。

(北橋市長)

まず、藤間蘭黄さん、ありがとうございました。今日は、短い時間でしたが、素晴らしい舞台の映像を、感動致しました。世界で活躍されているアーティストが、ここ北九州でいろいろな面で助言を頂くということは、大変誇りに思っておりまして、ぜひ、「東アジア文化都市」の成功に向けまして、お力添えを引き続き賜りたいのであります。よろしくお願い致します。

(藤間氏)

ありがとうございます。

(北橋市長)

あと、もう1つ、柴田英紀先生には、文化庁の学識経験者ということで、最初はちょっと遠くから見ておりました。段々近付いて行って、いろいろアドバイスを頂くようになって、そしてこの文化庁のプログラムを聞いて、来年の採択を目指して頑張りました。もうスタッフとも一所懸命頑張って、いろいろな方々のアドバイスを受けて。ところが2019年は豊島区が採択されました。その時、私、久しぶりに家で泣きました。

(林田氏)

そうですか。

(北橋市長)

ええ。もう本当に久しぶりに泣きました。その時、柴田さんが、「まあ、また頑張ってもいいんじゃないの」とか言っていたきまして、それでスタッフも、「よし、いっちょ、やったろうやないか」とこういふこと。その時に思ったのです。アーツディレクターということで、各界の専門家の方もいらっしゃいます。いろいろな文化のイベントでたくさんの方にお会いしていくわけではありますが、この市民の文化にかける情熱、頑張ってきたこの歴史、それを思うと、必ずいけるんだという、みんなそんな思いで、最後にプログラムをまとめて文化庁に再度チャレンジをしたという経緯があります。

それから致しますと、今回の「東アジア文化都市」は、市民にとりましては、この文化芸術にかけてきた諸先輩、そしてまた子どもたちも含めた、あらゆる世代の市民の熱い思いというものが、ここに結晶されていると思いますので、ぜひとも、市民の皆様のご参加の下に、ぜひ、人という面でしっかりとしたレガシーが残るように、大成功を目指して頑張っていかなければいけないと思います。これはもう、市民の皆様のご理解とご参加にかかっていると、今日、改めて思いました。本当に、皆さん、どうぞよろしくお願い致します。先生方、ありがとうございました。

(会場「拍手」)

(林田氏)

はい。大変力強いお言葉を、強く頂きましたね。柴田先生、今お聞きになっていていかがでしたか。良かったですね。すごく気合が入っていましたよね。

(柴田氏)

感動しました。

(林田氏)

そうですね、感動しました。深く感動致しました。

そしてやはり、市長、こういう柴田先生も含めて、蘭黄先生、どんどん、どんどん、素晴らしい方を巻き込み上手でもいらっしゃいますね。

それは、多分、市長のお力だと思います。そしてお人柄なんですか。どうぞ、柴田先生。

(柴田氏)

市長の魅力だと思います。

(林田氏)

魅力ですね。

(柴田氏)

それから、市長が文化へのものすごい愛情を持っておられますので、それがやはり、伝わるんだと思います。目に見えるものではありませんけれども、そういう何かパワーというかエネルギーに引きずられて、引っ張られて、やはりこれは応援しなきゃ、何か私でよかったら、尽力しなきゃという気持ちにさせるんですね。とても魅力的な市長様でいらっしゃいます。

(林田氏)

そうですか。ありがとうございました。

応援してくださるお二方に、どうぞ大きな拍手をお願い致します。

(会場「拍手」)

そして、拍手をしてくださっている皆様方ご自身が、本当に日本中の、世界中のモデルとして「東アジア文化都市 2020 北九州」をどんなふうにつくり上げていくか、ご覧なさいと。こんなすごい文化都市をつくっているんだよ、そして、できたんだよと。時間はこれからです。しっかりと、前に向かって、周りの方々をまた巻き込んで、頑張っていたら、そんなふうになります。

お三人のお言葉をしっかりと胸に止めていただいて、そして、すぐにも周りの方々に、このまちのことをお話しただけなら、また、素晴らしい文化都市への創造が始まっていくのではなかろうか。そう考えております。

ちょうど、お約束の5時になりました。時間通りのご協力を、本当にありがとうございました。どうぞ、皆様に大きな拍手をお願い致します。